

E.M. Forster の文学観、思想
—“*The Raison d’Être of Criticism*”を中心に

増田 有希子

1. はじめに

“I do not believe in Belief” (65). E.M. Forster (1879-1970) の最も著名な評論の一つである “What I Believe” (1938) の冒頭のこの短い一文は、Forster の思想が相対的、消極的、あるいは曖昧で、理解し難いものになることの必然性を示唆しているようである。Lionel Trilling は、Forster のエッセイ群のインパクトの弱さの理由として、彼の信念を持つことを避ける傾向を挙げている⁽¹⁾。また小野寺健も、作家としての Forster の評価が遅れた要因は、彼が「思想」といった硬い言葉にふさわしい、思想らしい積極的な思想を唱えなかった」ことであると述べている (5, 強調原文)。本稿は、「私は絶対的信条を信じない」という「信条」、この逆説的な表明の中に潜む Forster の文学観及びその根底にある積極的な思想を明らかにする試みである。

Forster の文学観や思想を英文学思想史の系譜の中に位置付ける試みにおいて、彼を Jane Austen に代表される英国小説の伝統的風刺作家と見做す批評家もいる。一方で、彼を前衛的モダニズムの作家として論じる者もいる。まずは、こうした Forster の文学観、思想をめぐる議論の概観を試みたい。Forster は自身の立場について、講演論文 “The Challenge of Our Time” (1946) の中で「私はヴィクトリア朝的自由主義の端に属しています」と述べている (54)。Forster のこの公言は、Peter Burra の評論 (1934) の次の一節を想起させる。“He [Forster] is an artist on the fringe of social reform....He has never cut himself off, as most artists sooner or later do, from the political and economic questions of the outer world” (311)。20 世紀初頭、伝統にとらわれることなく「自らの時代」において「自らの理性」に判断価値を置くことを基本に据えたモダニズムの運動が、ヨーロッパを中心に一大思想潮流となった⁽²⁾。文学の領域では、従来のリアリズムの手法とは異なる新しい表現方法を創造するための実験が行われ⁽³⁾、また作家たちの関心は、世紀末から世界大戦に至る変動期において危機的な状況に置かれた社会、「外的世界」を離れ人間の内面世界に向けられるようになった⁽⁴⁾。こうした時代潮流に反して Forster は自由主義的伝統の理念に基づき、政治、社会的な問題やそれと相互関係にある個人間の関係の問題に取り組んでいると Burra は主張しているのである。David Medalie も上記の Forster の公言から、彼の価値観の中心にある個人間の人間関係というテーマを見出す (Bradshaw 43)。また Medalie は、Forster の Bloomsbury グループとの関わり方を考察する中で以下のように述べている。The “most significant difference between Forster’s position and Moore’s is that Forster contextualises the quest for the Good by presenting it

always in relation to the imperfections of society and a world which is drifting ever further from the ideal conditions...in ancient Greece” (ibid. 38). Forster もその一員であった Bloomsbury グループとは、20 世紀初頭、Cambridge 大学の哲学教授 George Moore の思想に多大な影響を受けた学生団体、使徒会のメンバーを中心に結成された、芸術家を含む知識人の一群である。グループのバイブルであった Moore の著書 *Principia Ethica* (1903) は、“the Good”、即ち本質的に善なるもの、正しい行為とは何かを問う哲学書であり、それ自体価値のあるものとして、知識の追求、美の享受、社会の因習から一切離れた個人間の関係の構築が重視されている (ibid. 36)。Forster は講演論文 “How I Lost My Faith” (1959) の中で、彼自身 Moore の影響を受けなかったばかりか、バイブルさえ読まなかったことを告白しており⁽⁵⁾、Medalie はこのことに触れながら、Forster がグループと距離を置いた理由として、彼らの社会問題への無関心さを挙げているのである。一方これらの議論とは別に、彼のモダニズム的思考を強調する批評家もいる。例えば Malcolm Bradbury は、先述の講演論文 “The Challenge of Our Time” の Forster の公言に関して次のように述べる。“Of course, Forster’s confession that he belongs to the fag-end of Victorian liberalism does express a real inheritance; but that end is also the beginning of new forms of belief and of new literary postures and procedures” (E.M. 31). こうして Bradbury は *A Passage to India* を取り上げ、Forster のリベラル・ヒューマニスト的姿勢と、混乱した社会を超越した、秩序ある唯一の存在としての芸術の可能性の模索、前衛的な実験精神を特徴とするモダニズム的姿勢の双方をその作品に見出す⁽⁶⁾。また Randall Stevenson は、作品で人間関係や社会の問題を扱ってきた Forster は、近代性と物質主義の発展によって崩壊した世界に絶望し執筆に行き詰まりを感じるようになり、モダニズム作家と同様、革新的な作品の創造に取り組むようになったのであると述べ、Forster のリベラル・ヒューマニスト的思考からモダニズム的思考への変化を主張している (Bradshaw 212)。

以下では、上述の議論の中で提示された Forster の見解—社会問題やそれと関連する個人間の人間関係に価値を置く姿勢、文学作品の革新性や秩序を追求し芸術の価値を強調する傾向—に考察を加えるとともに、Forster の文学観、思想を理解する上で不可欠な、しかし注目されることの少ない講演論文 “The *Raison d’Être* of Criticism” (1947) を取り上げ、彼の文学観及びその根底にある積極的な思想を明らかにする。

2. “The *Raison d’Être* of Criticism”

1947年、ForsterはHarvard大学での音楽批評に関するシンポジウムで、“The *Raison d’Être* of Criticism”と題する講演を行った。著名な作家であり音楽愛好家としても知られていた彼の講演はシンポジウムの呼び物とされていたが、結果として、聴衆の文学研究者たちからの関心を集めることはできなかった⁽⁷⁾。なぜForsterはこの講演で文学研究者たちを惹きつけることができなかったのであろうか。そこで本稿では、当時アメリカの文学研究において主流を担っていた、モダニズムとも関連のあるニュー・クリティシズムの作品に対するアプローチと、講演論文“The *Raison d’Être* of Criticism”に見られるForsterの文学観、思想とを比較検討し、その相違を明らかにすることによって新たなForster像を提示する。

2.1. New Criticism

まず、New Criticismについて説明する。New Criticismとは1930年代に、それまでアメリカの文学研究において主流であった実証主義的研究方法⁽⁸⁾、具体的には、作者の伝記的事実や作者を取り巻く歴史的背景に目を向け、そこから作者の意図や作品の意味を解明するというある種のヒューマニズム的なヴィジョンを持った批評に取って代わった批評で、1950年代頃までアメリカの文学批評界で隆盛を誇っていた。その原点は1920年代のイギリスにあり、アメリカ南部の農本主義を掲げたJohn Crowe RansomやCleanth Brooks等の詩人、批評家たちが奨学金を得てイギリスに渡り、T.S. Eliotのモダニズムの詩や思想、I.A. Richards等による精緻な作品分析方法に触れることとなった。換言すれば、アメリカ南部の産業化を嘆いたアメリカの詩人、批評家たちの感性と、第一次世界大戦後の西欧社会、西欧人の精神の荒廃を憂え、失われてしまったかつての秩序ある世界を芸術に求めたイギリスのモダニズム詩人、批評家たちの感性とがそこで交差したのである(大橋 12-13)。New Criticismの思考の特徴として次の三点を挙げることができる。第一に、「世俗主義と産業主義」によって崩壊してしまったかつての秩序ある世界を文学に求め、様々な要素が統一された秩序としての文学、換言すれば有機的統一性を持つものとしての芸術を最も高度な文化的営為と見做し特権化したことである(Leitch 24)。第二に、複雑な要素を有する作品を客観的、科学的に分析することにより一つの正しい読みを見出すことと、その方法の体系化、制度化を目指した点である⁽⁹⁾。Brooks、Richards、William Empson、Robert Penn Warren等を中心に開拓、体系化された「詩の解釈と評価のための、理論と実践における教育上の

技法」は、「非常に明確なモデル」としてアメリカの大学の授業で採用され、New Criticism の普及に大いに貢献した (Leitch 32, 33)⁽¹⁰⁾。第三に、「起源、社会的背景、思想史、政治、社会的効果」など作品の外在的要因を一切排して、作品を作品としてそれだけで読むことを提唱した、つまり、ヒューマニズム的なヴィジョンを持たないテキスト中心主義、形式主義的な批評であったという点である (Leitch 23)。1960 年代以降、テキストのみに関心を向けた New Criticism は、その無政治性、社会との無関係性のために文学批評界における影響力を失うこととなった。しかしながら、その無政治性、社会との無関係性の背景には、負の政治性、即ち政治的な力関係、権力の作用が存在していたとも言える。1970 年代にアメリカの文学研究界に新たな潮流をもたらした脱構築批評の先導者の一人、J. Hillis Miller は New Criticism を批判してこう述べている。

The New Criticism has great value in its assumption that every detail counts, but the accompanying presupposition that every detail is going to count by working harmoniously to confirm the “organic unity” of the poem or the novel may become a temptation to leave out what does not fit, to see it as insignificant or as a flaw⁽¹¹⁾. (19, emphasis original)

西洋形而上学は、究極的な真理や一元的起源に立脚する同質的な全体を形成し異質的なものを排除するという思考を定着させてきた。こうした普遍的、不変的な西洋形而上学の思考に批判的立場を取る Miller は、テキストに蔓延る様々な不調和を鎮圧して統一に至らしめるという行為は、いわゆる他者を抑圧あるいは排除することになると主張しているのである⁽¹²⁾。このように、有機的統一性を持つ唯一の存在としての文学の特権化、作品の意味の特定化、作品分析方法の体系化を図る New Criticism とは、一方では、文学以外のもの、誤読や他者の読み、体系外のものを排斥するような、西洋形而上学に立脚した権威主義、絶対主義的な批評であったと言える⁽¹³⁾。このことも第一と第二の特徴に共通する特徴として指摘することができる。

2.2. 絶対的な知に対する Forster の懐疑

ここで、このような特徴を持つ New Criticism がアメリカで隆盛を極めていた時代に、Forster が講演で発表した内容について検討する。まず注目したいことは、上述の二つ目に挙げた New Criticism の傾向とは対照的な Forster の見解である。講演論文の冒頭で Forster は、芸術を批評するにあたり、「前例、失敗、比較」を通して学ぶといった、正しい判断、

つまり批評を行うための「事前の訓練」が必要か否かを問い、訓練することによって「教育が叡智ではなく知識を生む危険」や「正しい方向に向けられる努力が過ぎたために、自発的な喜びが発育不全になる危険」があると答える (105-06)。これは、正しい知、絶対的な知を追求し、そこに到達するための客観的、科学的、体系的な方法に依拠する New Criticism の姿勢に対する Forster の懸念の表明である。Forster は、New Criticism の方法だけではなく、それが取って代わった一種のヒューマンズ的なヴィジョンを持った実証主義的研究方法に対しても懐疑的である。

Problems of less relevance are considered, such as the conditions under which the work of art was composed, the influences which formed it..., the influence it has exercised on subsequent works, the artist's life, the lives of the artist's father and mother,...and so on, straying this way into psychology and that way into history....But if we wheel up an aesthetic theory...and apply it with its measuring rods and pliers and forceps, its calipers and catheters, to a particular work of art, we are visited at once, if we are sensitive, by a sense of the grotesque. It doesn't work. (113)

彼は、実証主義的研究方法も New Criticism と同様、正しい知、絶対的な知、それを獲得するための客観的、科学的方法、即ち西洋形而上学的な実体論的視点に立った作品研究であると見做し、その問題性を示唆しているのである⁽¹⁴⁾。彼のこうした絶対的な知の権威への懐疑の表明は他の演説や評論の中でも示されており、例えば評論 “Racial Exercise” (1939) の中で、北欧人種の純粋性を信じそれを証明しようと試みる或るドイツ人学者について次のように述べる。“According to his own lights, he was a disinterested researcher, for he refused to support what he knew to be true by arguments which he held to be false. The truth, being *a priori*, could afford to wait on its mountain top until the right path to it was found:...” (19). Forster は、アプリオリに存在するような絶対的な真理や知というものの虚構性を暴き、また客観性を標榜する似非科学的研究の愚かさを示しているのである⁽¹⁵⁾。

Trilling は Forster の数々の評論を考察する中で、Forster とは対照的な西欧的知性の伝統の保持者として、モダニズム詩人並びに New Criticism の代表的存在であった Eliot の名を挙げ、「エリオットの批評には、法をつくりたいという欲望と、威厳を保ちたいという意識的な努力が見られ、それらが疑問の余地のない効果を読者に与える。読者はその努力に反応し、その弁証法的体系に喜びを感じ、自分たちは文学や人生という重大な問題を扱っているのであると感じる」と述べる (141)。事実 Eliot は論文 “Tradition and the Individual Talent” (1919) の中で、批評とは詩人という個人ではなく詩自体に注視することであり、こうした

過程を経て芸術は科学の状態に近づくことができるのであると述べ、芸術の科学、客観性、Trilling の言う「法」や「弁証法的体系」を強調している⁽¹⁶⁾。一方 Forster について Trilling は、次のように主張する。

The laxness of the critical manner in which Forster sets forth his literary insights is no doubt the expression of a temperament—even of the fault of a temperament—but it is also the expression of an intention. It is *consciously* a contradiction of the Western tradition of intellect which believes that by making decisions, by choosing precisely, by evaluating correctly it can solve all difficulties. (148, emphasis original)

続けて Trilling は、「19 世紀初頭以降、西欧人は心のどこかで常に西欧の知的伝統に対して嫌悪感を抱いていたが、おそらくフォースターほどこの嫌悪を素直に表明した現代人はいないであろう」とまで述べ、西欧の知的伝統に対する Eliot と Forster の対照的な見方—換言すれば、New Criticism の傾向と Forster の姿勢との相違—を強調しているのである (148-49)。

2.3. Forster の文学観—「意外の驚き」を与える文学

西洋形而上学的な思考と結びついた権威的、絶対的なものを否定する点で、New Criticism の第一と第二の特徴に共通する特徴とは対照的なこの Forster の姿勢は、講演で語られる彼の文学観にも通じている。Forster は、批評の精神状態と創作の精神状態には相違があると指摘しながら、批評家、あるいは読み手や聴き手が芸術作品の真髄に近づくために必要なことは、芸術家の創作の精神状態に近づくことであると主張している (110-11, 113-14, 116)。Forster によれば、芸術家は創作時に「自分の無意識の領域へとバケツを下ろし、通常時には手の届かない何かを汲み上げ」、創作後は「自分が創作した作品との距離、意外の驚き」を感じるのである (111-12)。この創作時の精神状態を最も的確に表現したものとして、作家 Paul Claudel の作品中の言葉—「私は語りたいことを語るのではなく、眠りの中で構想」し、「語った後で、何を語ったのかを私は知る」—を引用する (112)。さらには、「我々—作品を見る人、聴く人、その他誰であろうと—も、こうした創作と同じような変化を体験するのであると述べる (113)。

ここで Forster の文学観について着目したい点が三つある。まずは、芸術作品において「意外の驚き」に高い価値を置く姿勢である。Forster は「意外の驚き」について繰り返し触れながら、「芸術作品は、常に初めて聴かれ、読まれ、見られ、常に意外の驚きを引き起こす

ことを期待しています。研究されることを期待してはいませんし、まして、繰り返し調べれば解けるようなクロスワード・パズルの姿を取ることもありません」と主張する (114)。また初期の小説の一つにおいて突然死ぬ人物が多すぎると非難されたことについて、彼自身次のように述べている。

I took heed, and arranged that characters in subsequent novels should die less frequently and give previous notice where possible by means of illness or some other acceptable device. But I was not inspired to put anything vital in the place of the sudden deaths. The only remedy for a defect is inspiration, the subconscious stuff that comes up in the bucket....But these defects—if defects they be—are vital to the general conception. They are not to be remedied by substituting sweetness.” (117)

ここで彼が訴えていることは、芸術作品の鑑賞者に対する「優しさ・親切心」、すなわち作品の安定性や固定性、予測可能性ではなく、むしろ作品にとってデメリットとなりがねない、「無意識の領域の材料」が生み出す「意外の驚き」の必要性であることがわかる。

Forster の小説論 *Aspects of the Novel* (1927) の中で論じられている「驚きの表情を少し浮かべた美」は、この「意外の驚き」に相当するものと考えられる (62)。そこで Forster は、「驚きの表情を少し浮かべた美」の重要性を強調し、「驚きの表情を浮かべていない美や、自身の美しさを当然のように受け取る美は、度が過ぎて嫌悪感を抱かせるようなプリマドンナを思い起こさせます」と語る (61-62)。具体的には、彼はそれを「小説におけるリズムの機能」の効果とし、リズムについては、「まるで月が満ちたり欠けたりするように動きながら、我々を驚き、新鮮さ、そして希望で満たすのです」と説明する (115)。またリズムを使った小説の実例として Marcel Proust の作品を挙げ、「最終編はまだ出版されていませんが、彼を絶賛する人たちによれば、最終編で全てはしかるべきところに収まり、失われた時は取り戻されて固定され、作品としての完璧な統一が得られるであろうということです。しかし私はそう思いません。私には、美的な統一というよりも、むしろ生成性、変転性を目指した作品のように思われます」と評価している (113)。ここから Forster が、文学を固定的なものではなくリズムカルな「生成性、変転性」を具えたものと見做し⁽¹⁷⁾、それがもたらす「驚きの表情を少し浮かべた美」に価値を置いていることがわかる。さらに彼はこの小説論の中で、「小説がそれ自体の方法で達成できるかもしれないようなタイプの美」という小説の理想の姿について語っている (116)。それは小説の「広がりという美」、小説の「完成ではなく、拡張、展開という美」であり、小説の終わりで読み手は、作品を

構成する諸要素が解放され「各々の自由」を享受しているように感じるのであると述べる (116)。小説論の草案で彼は、Laurence Sterne について賞賛しながら、「英語小説を厳密さから切り離し自由にするものはないのであろうか？」と記しており⁽¹⁸⁾、従って Forster にとっての小説の理想のあり方とは、小説の終わりにおいて、即ち永遠に、作品の諸要素が「厳密さ」から解放され生成、変転し続けることであり、またそれにより、読み手に「意外の驚き」を与え続けることであると考えられる (CB 3)。

“The use of form in modernist works frequently implies an assertion as well as a retraction; to posit, in this regard, is also to deny, or—to use terms particularly significant in Forster’s case—to include is also to exclude” (Medalie 98)。一般的にモダニズム文学の特徴と言われる、作品の「形式」、つまり安定性や固定性が強調される一方で否定されるという相反する要素の混在を重視する傾向が Forster の数多くのエッセイ、とりわけ小説論に認められると Medalie は述べる。実際 Forster は小説論の中で、プロットではなく、「ニーチェの言う「外形の強烈な腐食」があればいいのです。あらかじめ取り決められたものは全て虚偽なのです」と述べ、固定性や厳密さを否定している一方で、プロットが最終的に読者にもたらすものは、「厳密に構成された美的な何か」であると述べ、厳密な体系、小説の最終的な固定性を主張している (61, 71, qtd. in 71)⁽¹⁹⁾。このようなモダニズム小説の特徴である安定性や固定性の強調と否定の混在について平出昌嗣は、Virginia Woolf の作品 *To the Lighthouse* (1927) の中で Lily Briscoe が描きたいと思う絵がその一つのモデルとなると述べている (360)⁽²⁰⁾。

“Beautiful and bright it should be on the surface, feathery and evanescent, one colour melting into another like the colours on a butterfly’s wing; but beneath the fabric must be clamped together with bolts of iron” (Woolf 186, emphasis mine)。モダニズム小説は、表面上いかに曖昧で捉え難い、つまり予測可能性、安定性や固定性の欠如した作品であろうとその根底には必ず「鉄のボルト」のようにしっかりと支える堅固な統一性があり、それゆえに美しさを持つことができるのであると平出は説明する (360)。David Lodge の説明を借りれば、モダニズム小説においては、作品の予測不可能性、不安定さや流動性といった捉え難さ、複雑さを「補正するために、美的な統一という別の形態が一層顕著になる」のである (Bradbury and McFarlane 481, 強調筆者)。捉え難さと堅固な統一性の双方を具えた作品を創造しつつも堅固な統一性に重点を置く、こうしたモダニズム作家の文学観と、捉え難い「意外の驚き」に高い価値を置く Forster の文学観との相違を明確化することは容易ではない。しかしながら、モダニズムを「定式化・教条化」し、より強固な（有機的）統一性、秩序を作品に求める New

Criticism の文学観と Forster の文学観との間にはより根本的な違いがあると言えよう (富山 12)。また New Criticism においては、秩序ある唯一の存在としての文学を至高のものとして崇める傾向が見られるが、一方 Forster はと言えば、講演論文 “Art for Art’s Sake” (1949) の最後で、有機的統一体としての「芸術だけが重要であるとは思いません」と述べているように、芸術に権威を与え盲目的に崇拝することを否定するのである (93)⁽²¹⁾。

2.4. Forster の文学観—「我々の感情を掻き立て血を沸かせる」機能としての文学的言語の可能性、情報を提供する機能としての言語の不完全性

第二の注目すべき点は、Claude の作品からの引用文が示すように、芸術家の意図や意識を超越した言語を、芸術作品を構成する要素として見做していることである。このような言語について Forster は、評論 “Anonymity: An Enquiry” (1925) の中で次のように説明している。言葉には、情報を提供する機能の他に、「我々の感情を掻き立て血を沸かせる」機能があり、さらにこの機能には、定義することの難しい世界—「これを最も的確に表すためには消去法を使うしかない。それはこの世界ではなく、その法則は科学や論理学の法則ではなく、その結論は常識の結論ではない。さらにそれは、我々の通常の判断を留保させるのである」—を生み出す力が潜んでいる (80-81)⁽²²⁾。続けて彼は、「著者が没入していた美の世界に没入すると、我々は自分が今まで捨ててきたものより多くのものを見つけ、精神の故郷のような場所に辿り着き、聖書に書かれているように、はじめにあったのは話し手ではなく言葉であったということを思い出すのである」と述べる (83)。人間の意図や意識を超越した、「我々の感情を掻き立て血を沸かせる」機能としての文学的言語の可能性を強調し賛美する Forster の言語観は、ロマン派詩人の言語観を彷彿させる。Arden Reed は、イギリスロマン派詩人の言語観について次のように説明する。

In his note to “The Thorn,” Wordsworth underscores “the interest which the mind attaches to words, not only as symbols of the passion, but as *things*, active and efficient, which are of themselves part of the passion.” Similarly, Coleridge describes in his notebook a “focal word” that “has acquired a *feeling of reality*—it heats and burns, makes itself to be felt. If we do not grasp it, it seems to grasp us, as with a hand of flesh and blood, and completely counterfeits an immediate presence, an intuitive knowledge.....” In *Prometheus Unbound*, Shelley calls language “a perpetual Orphic song,....” And Keats in *Hyperion* evokes the image of “hieroglyphics old....”...Wordsworth, Coleridge, Keats, and Shelley here exemplify the emergence of language as a topic in English Romantic literature and display the alertness of that literature to its own status as language. (Reed 13, qtd. in *ibid.* 13, emphasis original)

Forster の言語観は、Reed の説明に見られる、自然に生じる強い感情を含む、あるいは情感を実感させるような言語、音楽性、イメージ性の高い言語といった、多様な要素を包含する言語への関心を高め、こうした言語に至高の地位を授けたイギリスロマン派詩人の言語観に近似していると言える。

しかしながら Forster の言語観は、このような理想主義的な言語観にとどまるものではない。彼は小説論の中で、「人間は自分に対して真実を語るわけではありません。自分に対してさえ、本当の事を語るわけではないのです。自分が密かに感じている幸福や不幸も、その理由を自分で完全に説明することはできません。なぜなら、言葉で説明した途端、その本来の性質が失われてしまうからです」と述べており、ここに、本来の性質、現実を覆い隠す、あるいは歪曲するという言語の問題、即ち、言語とその指示対象、Ferdinand de Saussure の言葉では、シニフィアンとシニフィエの完全な一致を前提とした、人間の意図や意識、情報を伝達する機能としての言語の不完全性に対する彼の洞察を見ることができる (58-59) ⁽²³⁾。また Nicholas Royle も、Forster が小説論の中で語る一節「私が何を考えているのかを、実際に口に出して言うまで、どうやって言い当てることができるのだろうか」を引き合いに出しながら、次のように述べる (71)。“This quotation takes us to the heart of Forster’s work: it entails uncertainty and the unpredictable, it foregrounds a strangeness in the very act of speech and writing....It implies that language, or ‘what I say’, is not simply a medium or tool; rather, language interferes, alters, invents” (1). Royle は、シニフィアンとシニフィエの間に生じる、確実な、絶対的な意味の不在という「奇妙な現象」に対する Forster の認識を示唆しているのである。

Forster が「我々の感情を掻き立て血を沸かせる」機能と情報を提供する機能とを対比して示しているこうした言語の問題は、Kenneth Burke が *The Philosophy of Literary Form* (1941) の中で、「詩的意味」と「意味論的意味」という表現で提示している問題と通底する性質を具えている。Burke によれば、前者は「あらゆる情緒的要素を最大限に蓄積する」性質のものであり、一方後者は「意味の客観的明晰性を複雑、曖昧にするようなあらゆる情緒的要素を切り捨て、抽象化・一般化する」性質のものである (148, 強調原文)。前者は「相互に、より一層広範囲な同心円的關係を持ち、「相互の排除を認めない積極的な包含」があり、一方後者は「正誤式で片付けることができる」のである (144-45)。また Burke は、後者の「意味論的意味」を「権威」や「芸術を破壊する行為」と結びつけて表現している (144)。こうした Burke の言語観について土田知則は、「言語が必然的に抱え込む矛盾やパラドック

スといった要素を抹殺せず、それらがあるがままに引き受けようとするバルト [Roland Barthes] 的な姿勢を、パークはバルトより二〇年近くも前に自己のものとしていたのである」と主張し、さらにはこうした Burke の立場について、「ポール・ド・マンの仕事に代表される「ディコンストラクション批評」が好んで取り上げることになる「内的矛盾」ないしは「内的差異」という [言語] の問題を予告する射程の広さを有していると言えるかもしれない」とまで述べている (50, 強調原文)⁽²⁴⁾。とはいえ Forster が、Geoffrey Hartman が言うところの、de Man、Miller、Jacques Derrida に代表される「大蛇の脱構築者」的な考え方を持っていたとは決して言えないであろう (qtd. in Leitch 240)。なぜなら、言語と主観性の関係について言えば、言語活動は人間の思考に従属するという伝統的な見方を Forster は保持していたと考えられ、この点において彼の言語観は、「言葉は常にそれ自身とは別のもの—より正確には別の言葉—を指し示すことしかできない」ので、読み手は不可避に読むことの不可能性に向き合うことになるという、de Man の議論全般を貫く基本的な言語観とは異なっているからである (qtd. in 土田 54)⁽²⁵⁾。しかしながら、Burke と同様 Forster の言語観にも、西洋形而上学に立脚する西洋の伝統的、権威的な言語観—言語は世界を正しく写し取り、言語とその指示対象の間には確実な、絶対的な意味があるとする考え方—の転覆を目論む脱構築の思想との同質性を認めることができる。言語とその指示対象との間の確たる関係を前提とする、情報を提供する機能としての言語の完全性を疑問視し、「我々の感情を掻き立て血を沸かせる」機能としての文学的言語の可能性、即ち多義性を賛美する Forster の言語観は、「文学形式における支配的モデル」として「異種混濁性」を強調する脱構築とは対照的に「統一性」を強調し、「文脈の統一性を図り作品の意味を特定する目的で、言葉のニュアンス、修辞的比喩、意味の微妙なあやに綿密な注意を払う」New Criticism の方法、イギリスロマン派詩人の言語への関心や賛美を「知の対象」としての言語へと向けた New Criticism の考え方は相容れないものであると言えよう (Leitch 23, 261, Reed 14)⁽²⁶⁾。

2.5. Forster の文学観—読者による「無意識の領域」における創作体験

最後は、「無意識の領域」、「眠りの中」といった、意図や意識の及ばない世界にいる芸術家を芸術作品の創造主と見做し、さらには、芸術家と同様に批評家、読み手や聴き手も創造主となる可能性を示唆している点である。評論 “Anonymity: An Enquiry” の中で Forster は、言葉と同様に個々の人間の精神にも二つの個性があり、「一つは表面にあるも

の、もう一つはさらに深いところに潜んでいるものである。(中略) この下層に潜んでいる個性は実に奇妙なものである。この個性は多くの点で全くの愚か者である。しかし、それなくして文学は生まれないのである」と説明する (82)。この深層に潜む、科学的、論理的思考、常識的見地から見れば「奇妙」で「愚か」な個性を全ての人間に共通するものと考える彼は、「偉大な文学のすばらしさは、作品を読んでいる人間を、それを書いていた時の作家の精神状態に近づけて変化させ、読者の心の中にも創作衝動を生み出すことにあるのである」と続けて述べる (83)。また Forster は評論 “Not Listening to Music” (1939) の中で、Wagner が Beethoven の序曲『コリオラン』に標題を付したことに對して「私は私の序曲『コリオラン』を失ってしまった。その壮大さや自由は消えてしまった。その絶妙な音はタールで舗装された道路のように固まってしまった」と述べ、作品に特定の意味が付与されたがために聴き手としての彼の創作衝動が失われたことへの不満を表明する (124)。このように、芸術家だけではなく、作品の鑑賞者による「無意識の領域」における創作体験の重要性を彼が示唆していることがわかる⁽²⁷⁾。

一方 Forster は講演で、「我々が実際、芸術家の精神状態に入り込み、その共作者となったと主張するのはおこがましいことです」と語っており、ここから、作品の鑑賞者の創作体験よりも、作品の絶対的権威者としての芸術家の創作体験を重視する彼の姿勢を読み取ることができる (113)。しかしながら続けて彼は、「私がブラームスの交響曲第四番を聴いてどれほど興奮したとしても、ブラームスと同じ興奮を体験したとは思えません。おそらくブラームスが感じたことは、私が興奮と理解したものとは異なるでしょう。しかし、音楽を通してブラームスから私に伝染があったのです」と語っており、ここで、読み手や聴き手の無意識的な創作が芸術家の創作と完全に一致することを彼が求めているわけではないことがわかる (113)。Trilling は、Forster の絶対的、最終的なものへの懷疑や嫌悪を Forster の小説の基本構造と関連付けた上で、次のように述べている。“And it is irritating to be promised a principle and then to be given only an hypothesis. The hypothesis...is useful, but we had wanted it to be conclusive. And Forster refused to be conclusive” (15-16)⁽²⁸⁾。Trilling のこの見解は、Forster の小説における最終的結論は読者に委ねられているということを示唆している。事実 Trilling は Forster 論の序論の冒頭で、「私にとって E.M. フォースターは、何度も読み返すことができる作品を生み出し、読み返すたびに、ほとんどの作家ができないこと、つまり何かを学んだという感じを我々に抱かすことのできる唯一の現存作家である」と述べており、このことは、作者だけではなく読者の、さらに言えば作者よりも読者の無

意識的な創作を Forster が重視していることを裏付けていると思われる (9)。読者による「無意識の領域」における創作体験に高い価値を置く Forster の文学観は、特定の「文脈」や「作品の意味」が読者を完全に支配することとなる New Criticism の方法とは根本的に異なっていると言える⁽²⁹⁾。

3. 終わりに

講演論文 “The *Raison d’Être* of Criticism” の考察から明らかになったことは、絶対的な知を疑う Forster の姿勢であり、「意外の驚き」に価値を置き、芸術の絶対的な権威を否定し、言語とその指示対象との間の確たる関係を疑問視する一方で、両者間の自由な関係を賛美し、読者による無意識的な創作体験を重視する Forster の文学観である。こうした考え方は、小説論の序論で彼が語る言葉、「私がこの小説論の題名に『諸相』という言葉を選んだのは、それが非学問的で漠然とした言葉だからです。我々読者に最大限の自由を許し、小説に対する読者の様々な見方、小説家の様々な見方の双方を表現できる言葉だからです」の中に要約されていると言えよう (16)。またそれを一言で表現するのであれば、先に述べた New Criticism の第一と第二の特徴に共通する特徴、即ち西洋形而上学の普遍的、不変的な伝統と結びついた絶対主義的な思考と相反する姿勢ということになるのである。

このような Forster の文学観の根底にある「絶対的信条を信じない」という精神は、政治、社会問題やそれと関連する個人間の関係の問題を論じた彼の評論の基本思想にもなっている。例えば先に触れた評論 “Racial Exercise” の中で彼は、人種の純粋性という信念を「根拠に政治的暴力や残虐行為が行われるのは西欧である」と述べ、西欧における絶対的価値への盲信と政治との否定的な関係性を提唱している (19)。同様に、ユダヤ人蔑視の問題を扱った評論 “Jew-Consciousness” (1939) において Forster が強調することも、「判断力を働かせることなく間違ったカテゴリーをつくること」、つまり言説を絶対視することが社会や人間関係に与える負の影響力なのである (14)。そして「絶対的信条を信じない」という精神とは、小野寺が述べるように見方を変えれば「あらゆる考え方を許して、あらゆる存在理由をみとめる立場」の思想、「思想・信条などでは整除しえない、そしてたえず変化してやまない感情をもっている矛盾だらけの人間を、まるごとそっくり尊重する考え方」とも言える (11, 280)⁽³⁰⁾。“I do not believe in Belief” で始まる評論の最後で Forster は、「国民は一人一人別々に生まれ、一人一人別々に死ぬほかはなく、この不可避の終着点のために全体

主義のルールから必ず脱線してしまうのである」と述べ、人間の多様性、多様な価値の尊重を強調している (73) ⁽³¹⁾。このように、Forster の文学観の根底にある「絶対的信条を信じない」という精神、またそれと結びついた多様な価値を尊重する姿勢は、彼の政治、社会観、人間観の根本思想にも通じており、この点において Forster の文学観は、New Criticism の第三の特徴、即ち政治、社会的、ヒューマニズム的ヴィジョンの欠如したテキスト中心主義、形式主義の姿勢とは著しい対照を成していると言えるのである。

Trilling は、絶対的信念や意志を拒む Forster の姿勢について次のように述べている。We “find another meaning in the refusal. It speaks to us of a world where the will is not everything and it suggests that where the will is not everything it will be a better and a more effective will” (155). 一見して曖昧で消極的な姿勢と思われる Forster の「絶対的信条を信じない」という「信条」、この逆説的な表明の中に潜んでいる可能性があると言う「もっとすばらしい、もっと効果的な意志」とは何であろうか。それは Forster の文学観、そして政治、社会観、人間観の根底にある多様性―多様な個性や生き方―を尊重する意志なのではないだろうか。

次なる課題として、Forster の作品に焦点を当て、本稿で明らかになった彼の文学観、思想がどのように反映されているのかを考察することとする。

付記

本稿は、平成 25 年度学習院大学英文学会大会（平成 25 年 11 月 16 日）における口頭発表原稿に加筆・修正を施したものである。

発表や本稿執筆に際し、橋本横矩教授には多大なご指導を賜った。また本研究を進めるにあたり、塩谷清人教授、慶応義塾大学文学部異孝之教授をはじめ多くの先生方に大変お世話になった。ここに記して深甚なる謝意を表したい。

注

* 本稿の “The *Raison d’Être* of Criticism” をはじめ “What I Believe”、“The Challenge of our Time”、“Racial Exercise”、“Art for Art’s Sake”、“Anonymity: An Enquiry”、“Not Listening to Music”、“Jew-Consciousness”、“In My Library” は、E.M. Forster, *Two Cheers for Democracy*, ed. Oliver Stallybrass (London: Arnold, 1972) を底本としている。

* 訳者名が明記されている場合を除き、引用文の日本語訳は全て筆者によるものである。

(1) “All this [essay] is fine, yet the total effect is not really impressive. For the fact is that a good critic...is made not only by perception but by belief” (147).

(2) 木下元ほか編『コンサイス 20 世紀思想事典』（三省堂、1989）：868-69 頁。

(3) イギリス文学界におけるモダニズムについては、Malcolm Bradbury が *Modernism: A Guide to European Literature 1890-1930* の中で次のように説明している。London’s “high achievement in the arts” between 1890 and 1920 “has been judged on the one hand as a distillation of the English tradition, a disturbance, yet, but also the realization of the sequence. On the other hand, it has been seen as...a chance importation of foreigners, these often temporary expatriates, from Ireland or

- America, who went elsewhere for their greatest work, and whose real contribution was not to the English tradition, which never fully assimilated Modernism at all, but to an international movement whose English-language realization is most apparent in the United States” (173).
- (4) 一方 Morag Shiach は、モダニズムの「外的世界」との関わりについて次のように説明する。
 “Modernism is characterized both by a recognition of fragmentation and by a desire to resolve or overcome this through the integrity of aesthetic form” (10). 同様に Bradbury も次のように述べる。
 The view of most modernism is “dualistic: art may reach beyond the world of men and things...but it can never leave that world behind” (E.M. 33-34). Bradbury and James McFarlane は、モダニズムの社会との関わりについてのこうした異なる見解に言及している。
 “The paradox of Modernism lies in the relationship between these two very different explanations of and justifications for it;...On the one hand, modernism has been an arcane and a private art:...On the other hand, specialism and experimentalism can be held to have great social meaning; the arts are *avant-garde* because they are revolutionary probes into future human consciousness” (27-28).
- (5) Forster, *The Prince's Tale and Other Uncollected Writings*, ed. P.N. Furbank (London: Andre Deutsch, 1998), 313.
- (6) “Forster is deeply involved in some of the largest intellectual, cultural, and aesthetic collisions that occur in the transition into this century; and it is his sharp sense of the contingent, of the powers that rule the world of men, that makes him so. The result is a complex version of modern literary disquiet. An intermediary between those two literary traditions of “moderns” and “contemporaries”...” (E.M. 34, emphasis original).
- (7) Furbank, *E.M. Forster: A Life* (Oxford: Oxford UP, 1979), 272. Sunil Kumar Sarker, *A Companion to E.M. Forster* (New Delhi: Atlantic, 2007), 88. Wendy Moffat, *E.M. Forster: A New Life* (London: Bloomsbury, 2010), 269-70. また T.S. Eliot と共に名誉ゲストとして招かれたシンポジウムの最後のパーティにおいても、人々は Forster には関心を寄せず、モダニズム詩人、New Criticism の代表的存在であり Harvard 大学の卒業生でもあった Eliot の周りに群がったと言われている。
- (8) 20 世紀初頭、経験的事実のみに認識の根拠を認める立場を取る実証主義哲学の影響を受けたフランスの Gustave Lanson 等によって提唱された文学研究方法である。
- (9) W. K. Wimsatt と Monroe C. Beardsley は、論文 “The Intentional Fallacy” (1946) の中で文学批評を次のように表現している。
 “Judging a poem is like judging a pudding or a machine” (qtd. in Leitch 25). また John Crowe Ransom は、“Criticism, Inc.” (1937) で次のように述べる。
 “Criticism must become more scientific, or precise and systematic, and this means that it must be developed by the collective and sustained effort of leaned persons—which means that its proper seat is in the universities” (qtd. in Leitch 34).
- (10) I.A. Richards の *Practical Criticism* (1929) は、選り抜きの短詩についての（数百名の Cambridge 大学の学生による）評価を分析したものである。William Empson の *Seven Types of Ambiguity* (1930) は、「本質的な形式主義の手法を確立した中心的テキスト」であり、Cleanth Brooks と Robert Penn Warren の共著 *Understanding Poetry* (1938) は、Richards の著作に依拠した、文学教育界における「有力な教科書」であった (Leitch 31, 33)。
- (11) 実際 Wimsatt と Beardsley は、上述の論文の中で次のように述べている。
 “Poetry succeeds because all or most of what is said or implied is relevant; what is irrelevant has been excluded, like lumps from pudding and “bugs” from machinery” (qtd. in Leitch 25, emphasis original).
- (12) J. Hillis Miller と同様の立場を取る Jacques Derrida は、*L'écriture et la différence* (1967) において、「それ [自体] に一つの中心を与え、ある現前点に、ある固定した起源にそれ [自体] を引き戻そうとすることによって」成り立っている西欧形而上学の「構造の構構性」を批判している (211, 野村英夫訳)。この「西洋形而上学の集大成」と言える思想が、「統一的、絶対的な知の体系」、「弁証法的な統一性」を目指したヘーゲル哲学であり、Derrida は *Of Grammatology* (1967) 等において、ヘーゲルの弁証法的な概念、止揚を「西洋形而上学的な支配原理から生じる強引な武力行使」と見做している (土田・青柳・伊藤 214-15)。
- (13) Vincent B. Leitch は、Brooks が論文中述べた言葉を引用しながら、New Criticism の絶対主義性に言及している。
 “What he [the New Critical reader] had to avoid, above all, was a “varying

- spectrum of possible readings.” The specters of relativistic and pluralistic hermeneutics haunted New Criticism” (29). また A. Walton Litz の論文中、New Criticism の「硬直性と教条主義」がその衰退の要因の一つとして挙げられている (qtd. in Leitch 33)。
- (14) 同様に Forster は、小説論 *Aspects of the Novel* の中で次のように述べる。“He [The pseudo-scholar] would rather relate a book to the history of its time, to events in the life of its author, to the events it describes, above all to some tendency. As soon as he can use the word “tendency” his spirits rise, and though those of his audience may sink they often pull out their pencils at this point and make a note, under the belief that a tendency is portable” (8, emphasis original).
- (15) 1920 年の評論 “The Consolations of History” の中でも Forster は、「一つの偉大な目的、即ち何世紀にもわたって続く本質的な善の緩やかな発展」を目指した道德的視点による歴史の評価について、「ともかく、人々尊大な姿勢で、独断的に人間たちを評価する学者一は、発展という明白な勝利を結論付けることができるのである」と辛辣に述べ、歴史の弁証法的発展というヘーゲルの、西洋形而上学的な観点を批判し、本質的に善なるものを疑うのである (AH 161)。
- (16) Eliot, “Tradition and the Individual Talent,” *Literary Criticism: Literary and Cultural Studies*, ed. Robert Con Davis and Ronald Schleifer (New York: Longman, 1998), 33-38.
- (17) Forster は、評論 “Anonymity: An Enquiry” の中で文学について論じながら、以下のように自分自身に警告している。“I do not say literature “ought” not to..., because literature is alive, and consequently “ought” is the wrong word to use” (81, emphasis original). ここからも、彼が文学を「生きているもの」、つまり「生成性、変転性」を具えたものとして見做していることがわかる。
- (18) Moffat は、ここで Forster の言う「厳密さ」について次のように説明する。“For Forster, conscientiousness is the covering term for all the ways in which writing doggedly rehearses familiar conventions and rewards the expectations of a reader reluctant to be surprised” (“LC” 331).
- (19) 同様に Forster は、二度目のアメリカ訪問時 (1949 年) の講演論文 “Art for Art’s Sake” の中で次のように述べる。“Without form the sensitiveness vanishes. And form is as important today...as it ever was in those less agitating days of the past” (92). ここで、彼が「形式」という安定性や固定性と、「感受性」という流動的なものの双方の必要性を主張していることがわかる。
- (20) しかしながら、別の箇所でも平出昌嗣が述べているように、モダニズムの概要は論者によって異なり、またモダニズムの特徴といわれるもののうち「どの相が強く現れるかは作家によって異なる」(24)。同様に、Bradbury and McFarlane も次のように述べる。“The notion of the ‘modern’ undergoes semantic shift much faster than similar terms of comparable function, like ‘romantic’ or ‘neo-classical’; indeed, as Lionel Trilling says, it can swing round in meaning until it is facing in the opposite direction” (22, emphasis original).
- (21) Forster のこうした主張は、Lionel Trilling が指摘する Forster の姿勢— Forster “asks us to relax. He can tell us, and very movingly, of the importance of literature, but he never intends to make any single literary work important”—にも通底すると思われる (142)。
- (22) ここにおいて、人間の意図や意識、科学的、論理的思考、常識といった「外的世界」の及ばない内的な領域への関心という点で、彼の文学観とモダニズム作家の文学観との共通性を指摘することができるかもしれない。Forster がモダニズム作家のように、その関心のある領域をいかに表現するかという問題意識を持って従来の文学的手法とは異なる新たな手法を試みたのか否かについては、さらに別の考察が必要であろう。
- (23) 伝統的な言語観において、言葉は事物や概念を確実に指し示すための道具であった。この伝統的な言語観を否定し、新たな言語観を提示したのが Ferdinand de Saussure である。シニフィエ (記号内容) とシニフィアン (記号表現) から成る言葉、シーニュ (記号) が先に存在し、それが事物や概念といった現実世界を生産すると彼は考えた。また彼は、言葉の規則体系の側面であるラングを研究対象とし、シーニュとは言葉という体系内の一つの構成要素であり、その価値を決定しているものは他のシーニュとの差異であるという考えを打ち出し

- た。言葉という体系内における他のシーニュとの差異によって決定されたシーニュの価値が、現実世界を作り出す、こうした Saussure の視点は、世界の見方を実体論から関係論へと変化させた (土田・青柳・伊藤 18-32, Davis and Schleifer 265-79)。
- (24) 1950 年代から 60 年代にかけてフランスでは、Saussure の関係論的視点の影響を受けた、相対主義的なテキスト観を持つ構造主義の文学批評家たちが、精力的なテキストの読みを実践していた。その担い手となったのが Roland Barthes である。“What is Criticism?” (1964) の中で彼は、文学研究とは作品の意味を解説することではなく、その意味を作り上げた規則や拘束を再構成することであり、その目的は世界に特定の意味を付することではなく、何らかの意味を付することであると主張している (Davis and Schleifer 280-83)。こうした彼の視点は、作品に究極的な意味を与える絶対的な創造主＝起源としての作者という伝統的な考え方を否定した論文「作者の死」(1968) を堺に、意味作用の本質的な不安定性を強調するポスト構造主義的な視点へと移行する (Barry 63)。
- (25) また以下の東浩紀の説明にあるように、Derrida にとって、「我々の感情を掻き立て血を沸かせる」機能や「詩的意味」を具えた言語への賛美、即ち言語の多義性への賛美とは、Derrida の最大の標的、ヘーゲル哲学の弁証法と結びつくものである。「ひとつの記号 (エクリチュール) の多義性」の「探究は時間的な遡行、かつてあった豊かさ (過去) への回帰としてイメージされる。そしてそのイメージはさらに裏返され、多義性が完全に明らかになるある未来の時点が、それが「いくら遠かろうとも」理念的に想定されることになるだろう。過去－現在－未来は多義性の思考においては一直線に配置され、さらに過去と未来は繋がれて円環をなすわけだ。この直線的かつ円環的な思考をデリダが「弁証法」と名指すのは、言うまでもなく、その特徴がヘーゲルによって最も強力に主張されたものだからである」(24)。
- (26) イギリスロマン派詩人、New Criticism の言語観に関して Arden Reed は、本稿本文中の引用文に続けて以下のように述べる。“Michel Foucault argues that such self-awareness is no aberration but an integral part of a larger historical development: “From the nineteenth century, language began to fold in upon itself, to acquire its own particular density, to deploy a history, an objectivity, and laws of its own. It became one object of knowledge among others, on the same level as living beings, wealth and value, and the history of events and men.” Like the Romantics, literary critics make language an object of knowledge....As recently as the 1950s and 1960s, American critical interest in the language of poetry usually expressed itself in stylistic studies that tended to eschew interpretation in favor of describing technical innovations” (13-14)。
- (27) 評論 “In My Library” (1949) において Forster は、「非常な本好きであったが、本に支配されることはなかった」という歴史家 Edward Gibbon を称賛している (298)。ここからも、読み手の創作体験を重んじる彼の姿勢を読み取ることができる。
- (28) 同様に Bradbury も次のように述べる。“Forster may have an ideal of unity, a will to a whole solution, but we mistake him if we see only that in him. For he is characteristically not a novelist of solutions, but rather of reservations...” (E.M. 34)。
- (29) 読者反応理論を掲げる Stanley Fish は “Interpreting the *Variorum*” (1980) の中で、辞書、文法、歴史等文献を調べるという行為は、読む (反応する) 行為と無関係に、あらゆるテキストの意味は特定されていると仮定していることになると述べ、実証主義的研究方法を批判している (Davis and Schleifer 181-96)。即ち New Criticism の方法と同様に実証主義的研究方法においても、読者は特定のテキストの意味—具体的には (実証主義的研究方法について)、絶対的権威者である作者の意図、そうした作者が作品に付与した正しい意味—によって完全に支配されるということになる。またモダニズムの作品においては、その独創性、革新性といった世俗的なものとはかけ離れた高度な芸術性のために、作品と読者との距離は開き、「素養ある読者」(Fish が、テキスト解釈の主観主義に歯止めをかけるために導入した概念) 以外の読者は排除される傾向にある。ところで、意図や意識の及ばない世界における創作体験を強調する Forster の文学観は、興奮状態にある時の情感、人間の本质である偉大にして単純な感動、こうしたものが自ずと溢れ出たものが詩であると *Lyrical Ballads* の序文で主張す

- る William Wordsworth の文学観と通底する一面を有している (292, 307)。しかしながら Robert Scholes が指摘しているように、Wordsworth は同じ序文の中で、読者は詩人ほど「言葉が經由してきた意味の様々な変化や、個々の観念の相互関係の不安定さや安定さといったものに精通しているとは思えない」ので、詩を「軽々しく軽率に判断する」べきではないと、また「詩、その他の芸術全てにおける正確な鑑賞力」は「習得する才能である。それは、思索と、長く継続的に最高の作品に接することによってはじめて得られるものである」と述べており、こうした点において両者の文学観には根本的な相違があると言える (310, 312, 強調原文)。
- (30) 同様に Trilling も、絶対的なものへの信仰と想像力の欠如という弱点のために自由主義者—Forster が距離を置いていたと言われる自由主義的伝統を支持する者—は、現実社会に現れる異常なことを受け入れることができないのであると主張し、絶対主義的な思考及び想像力の欠如と、多様性を許容しない姿勢との関連性を示唆している (14)。
- (31) また同評論の中で Forster は、彼が最も賞賛すると言う人々—“those who are sensitive and want to create something or discover something, and do not see life in terms of power”—が自由に自己表現すること、つまり彼らの多様な価値を認める社会の必要性を唱えている (67)。

参考文献

- Barry, Peter. *Beginning Theory: An Introduction to Literary and Cultural Theory*. Manchester: Manchester UP, 2009. Print.
- Barthes, Roland. *Introduction à l'analyse structurale des récits*. Trans. Hikaru Hanawa. Tokyo: Misuzu Shobo, 1979. Print.
- Bradbury, Malcolm. “Two Passages to India: Forster as Victorian and Modern.” *E.M. Forster's A Passage to India*. Ed. Harold Bloom. New York: Chelsea, 1987. 29-44. Print. (referred in the text as [E.M.])
- and James McFarlane, eds. *Modernism: A Guide to European Literature 1890-1930*. London: Penguin, 1991. Print.
- Bradshaw, David, ed. *The Cambridge Companion to E.M. Forster*. Cambridge: Cambridge UP, 2007. Print.
- Burke, Kenneth. *The Philosophy of Literary Form: Studies in Symbolic Action*. Baton Rouge: Louisiana State UP, 1967. Print.
- Burra, Peter. “Peter Burra's Introduction to the Everyman Edition.” *A Passage to India*. Ed. Oliver Stallybrass. London: Penguin, 2005. 309-26. Print.
- Davis, Robert Con and Ronald Schleifer, eds. *Literary Criticism: Literary and Cultural Studies*. New York: Longman, 1998. Print.
- Derrida, Jacques. *L'écriture et la différence*. Trans. Atsuko Kajitani, et al. Tokyo: Hosei UP, 1983. Print.
- Forster, E.M. *Abinger Harvest and England's Pleasant Land*. Ed. Elizabeth Heine. London: Andre Deutsch, 1996. Print. (referred in the text as [AH])
- . *Aspects of the Novel and Related Writings*. Ed. Oliver Stallybrass. London: Arnold, 1974. Print.
- . *Commonplace Book*. Ed. Philip Gardner. California: Stanford UP, 1985. Print. (referred in the text as [CB])
- . *The Creator as Critic and Other Writings by E.M. Forster*. Ed. Jeffrey M. Heath. Toronto: Dundurn, 2008. Print.
- . *The Prince's Tale and Other Uncollected Writings*. Ed. P.N. Furbank. London: Andre Deutsch, 1998. Print.
- . *Two Cheers for Democracy*. Ed. Oliver Stallybrass. London: Arnold, 1972. Print.
- Furbank, P.N. *E.M. Forster: A Life*. Oxford: Oxford UP, 1979. Print.
- Leitch, Vincent B. *American Literary Criticism Since the 1930s*. London: Routledge, 2010. Print.
- Medalie, David. *E.M. Forster's Modernism*. Basingstoke: Palgrave, 2002. Print.
- Miller, J. Hillis. *Fiction and Repetition: Seven English Novels*. Cambridge, MA: Harvard UP, 1982. Print.

Moffat, Wendy. “*A Passage to India* and the Limits of Certainty.” *Journal of Narrative Technique* 20 (1990): 331-41. Print. (referred in the text as [“LC”])

---. *E.M. Forster: A New Life*. London: Bloomsbury, 2010. Print.

Reed, Arden, ed. *Romanticism and Language*. New York: Cornell UP, 1984. Print.

Royle, Nicholas. *Jacques Derrida*. London: Routledge, 2003. Print.

Sarker, Sunil Kumar. *A Companion to E.M. Forster*. New Delhi: Atlantic, 2007. Print.

Scholes, Robert. *Structuralism in Literature: An Introduction*. New Haven: Yale UP, 1974. Print.

Shiach, Morag, ed. *The Cambridge Companion to the Modernist Novel*. Cambridge: Cambridge UP, 2007. Print.

Trilling, Lionel. *E.M. Forster*. London: Hogarth P, 1951. Print.

Woolf, Virginia. *To the Lighthouse*. Ed. Stella McNichol. London: Penguin, 1992. Print.

Wordsworth, William and Samuel Taylor Coleridge. *Lyrical Ballads*. Ed. R.L. Brett and A.R. Jones. London: Routledge, 2005. Print.

東浩紀『存在論的、郵便的—ジャック・デリダについて』（新潮社、1998）。

大橋洋一編『現代批評理論のすべて』（新書館、2006）。

小野寺健『E.M.フォースターの姿勢』（みすず書房、2001）。

木田元ほか編『コンサイス 20 世紀思想事典』（三省堂、1989）。

土田知則『ポール・ド・マン—言語の不可能性、倫理の可能性』（岩波書店、2012）。

土田知則・青柳悦子・伊藤直哉『現代文学理論—テキスト・読み・世界』（新曜社、1996）。

富山英俊編『アメリカン・モダニズム』（せりか書房、2002）。

平出昌嗣『イギリス・モダニズム小説』（彩流社、2009）。